

“社会を明るくする運動”

～犯罪や非行を防止し、立ち直りを支える地域のチカラ～

7月9日(日)中央大会「区民のつどい」を開催しました！



作文コンテスト表彰式(小学生の部)



作文コンテスト表彰式(中学生の部)



《“社会を明るくする運動”とは》

すべての国民が犯罪や非行の防止と罪を犯した人たちの更生について理解を深め、それぞれの立場において力を合わせ、犯罪や非行のない安全・安心な地域社会を築こうとする全国的な運動です。毎年7月を強調月間として全国で展開されています。

プログラム

第一部 セレモニー

作文コンテスト表彰式
推進委員長賞・常任委員長賞作品発表

「いのち」[社会を明るくする運動]を題材に、区内小中学校の皆さんから2,049点ものご応募をいただき、その中から小中各5作品の表彰を行いました。

第二部 映画上映

映画「塀の中の中学校」

長野県松本市にある「松本少年刑務所」の所内には、義務教育を終えていない受刑者のための公立中学校「松本市立旭町中学校桐分校」がある。そこに石川順平(オダギリジョー)が副担任として赴任する。

桐分校には全国の刑務所から選ばれた佐々木昭男(大滝秀治)、ジャック原田(すまけい)、川田希望(渡辺謙)、小山田善太郎(千原せいじ)、龍神姫之丞(染谷将太)の5人が入学してきた。彼らは満足に教育を受けておらず、読み書き計算がほとんど出来ない。そんな彼らへ税金を使って教育を施すことに順平は疑問を感じるのだが…。

教師も生徒も共に悩み葛藤しながら卒業式を迎えるまでの1年間の中で、生きることの意味・学ぶことの意味に気づく姿を描いている。

..... “社会を明るくする運動”にご協力頂いている団体(50音順)

寄附金

一般社団法人 巣鴨庚申堂奉賛会
株式会社 アール・エス・シー
株式会社 サンシャインシティ
株式会社 鈴和
株式会社 藤久不動産
株式会社 東武百貨店池袋店

宗教法人 高岩寺
宗教法人 西福寺
宗教法人 祥雲寺
宗教法人 眞性寺
宗教法人 法明寺
東京商工会議所豊島支部

東京信用金庫
東京豊島西ライオンズクラブ
豊島区商店街連合会
豊島区町会連合会
豊島区保護観察協会

寄贈

巣鴨信用金庫
東京信用金庫
東京都薬物乱用防止推進豊島地区協議会

小学生の部

1,686
作品

作文コンテスト 受賞作品

中学生の部

363
作品

★ ★ 推進委員長賞

心にブレーキをかけるには



目白小学校
6年生
とおしま
遠島
まひろ
麻央さん

犯罪を犯したら罰せられる。それなのに何故、犯罪を犯す人がいるのかと考えてみた。例えば、仕事うまくいかない、人間関係がうまくいっていないなどで日々に対してむしゃくしゃしているから。もしくは単なる愉快犯の場合、みんなに注目されたいから、という理由が考えられた。

ではそういう時は皆犯罪を犯すのか、ということとは違うと思う。私だって人間だからむしゃくしゃすることは珍しくない。でも犯罪は犯さない。学校のお話朝会で前、先生が「してはダメなこと、いいことの判断をしてブレーキをかけよう。」とおっしゃった。どうしたらブレーキをかけられるのか?何がブレーキになるのか?と考えて三つのことがあると思った。

まずは犯罪を犯した後の自分の未来を想像すること。警察に逮捕されたり被害者の記憶に残ったりする。自分が築いてきた信用がなくなるどころか、今後ずっと犯罪者というレッテルを貼られ続ける未来だ。仮に犯罪行為が人に気づかれなくても自分の中に重い気持ちが残る。どちらにせよ自分の未来に悪い影響は残る。

二つ目は、自分の明るい未来を想像すること。仮に今うまくいってなくても、犯罪を犯した時と犯さなかった時の未来を比較してみる。そうして自分の未来に希望をもつことだ。

最後は、自分に期待してくれる人の存在を忘れないことだ。人から期待されていたり、良い意味で注目されている人は期待を裏切ることになるから、犯罪はできないしやる必要がない。私の場合は、両親や親戚、学校や習い事の先生、友達……ざっと数えただけでも、すぐに50人以上浮かぶ。その存在が私にブレーキをかけていると思う。

よって犯罪をとめるブレーキとなるのは、
① 未来を想像する力
② 将来への希望をもつこと
③ 期待してくれる人の存在の三つだと考えた。

私はありがたいことにこの三つ全てに恵まれているが、そのうちのどれか欠けている場合、どうすればいいのか。まわりの人はサポートできるのだろうか。

まず、①が欠けている場合。本人ができることとしては、自分に余裕をもって行動する前に一度立ち止まって考える。本を読んで想像をつける。ということ。

②が欠けている場合。将来に希望をもつためには、自分に自信をもつ必要がある。私は6年間そろばんをやってきたが結果が出ないこともあった。でもこつこつ続けていくことで、思いがけない嬉しい結果も出て、自分に自信をもてた。だから諦めないで努力を続けて認められるように経験を重ねると良いと思う。また、周りの人は成果が出ていなくても努力を続けている人を認めることが大切だと思う。

そして③が欠けている場合。関わる人を増やして自分を信用してくれる人を増やす。その為に挨拶をする。挨拶はその人の存在を認める第一歩になるからだ。でも実際に犯罪を犯した人にも挨拶ができるのかと聞かれると怖くてできないかもしれない。まずは身近な人への挨拶から始めて、その輪をどんどん広げていく。

もし友達がむしゃくしゃから悪いことをしそうになっていたら、隣にいて悩みや話をさく。そうすることで今度は、自分がむしゃくしゃしている時、その友達が悩みを聞いて一緒に考えてくれると思う。私も、頼られる存在になりたい。そうして自分はこんなにも期待されているのだと思える機会をたくさんもつこと。

以上が心のブレーキをかける助けになるのではないかな。今後も自分のブレーキをもつとともに、周りの人の心のブレーキとなっていきたい。

★ ★ 推進委員長賞

誰かの大切なあなた



池袋中学校
3年生
ほしの
星野
ひより
日和さん

きっかけは祖父の死だった。それは中2の秋。3年前から闘病していた祖父は71歳を迎える数日前の雨の日、静かに亡くなった。寡黙で厳しい面もあつたが、私を見る目は柔らかく、花が好きで、季節に合わせた美しい花を育てていた。

祖父の弔問や葬式に訪れた人達は思い出を語り、私の知らない祖父を教えてくれた。

祖父は50年来地域活動をしていた。正直に言うとどんな活動をしていたかはあまりよく知らない。しかし、祖父がいたおかげで……祖父に助けられた……そのエピソードの多さは社交辞令ではないと確信させてくれた。

ある人は何十年も前に地方から1人上京し孤独に暮らしていた自分に声をかけてくれた祖父のおかげで地域に溶け込み、今もお地域活動を続けているという。同じく見ず知らずの自分に声をかけ家族のように接し、時には厳しくさそれらも今この地域に根付き、地域の一員になった。今度は自分が地域の人達を大切にしたいと思っている、という人もいた。

そんな話の中、続く言葉に私は驚くことになる。「1人で生きていってはいけません。」と祖父から言われ救われたのだと彼らは言った。自分の居場所を見つけたこの地域で大切な家族とめぐり合う事も出来た。遠くに住む自分の親達も安心させる事が出来て感謝している、と。

「1人で生きていってはいけません。」祖父から何度となく聞いた言葉だ。ずっと私自身に向けられた言葉だと思っていた。少しお説教が含まれているようなその言葉の後ろには、皆が見守っているよ、いつでも手を貸すよ、という言葉があつた。祖父はわかっていたのだ。孤独に暮らしていた人や見ず知らずの青年たちも誰かの大切な人であり、彼らにとっても大切な誰かがどこかにいると。私は疎ましくさえ思っていたその言葉が喉元に込み上がって

きたものと一緒にすんと胸に取まるのを感じた。思い出話は絶えることなく続いた。祖父の子供時代を知る人はアイスクリームをいつも譲ってくれる優しい少年だったと言った。私はなんだかすずりとしてしまった。

私は祖父は祖父という生き物だと錯覚していたのではないだろうか?しかし違つたのだ。私の祖父であり、地域の面倒見のいいおじさんであり、アイスクリームを譲ってくれる優しい少年だった。私の知る祖父は祖父の人生で見ればほんの一部だったのだ。それでも私は祖父の人生をかけて大切にされたと思う気持ちに変わりはない。皆が大切な命として生まれ育ちそれぞれ濃密な人生を歩いてきた事を想像してみるようにすると不思議と親近感と共に尊敬の気持ちが湧いた。知らない誰かの人生を、命を、大切にしなければならぬと強く感じた。

私も社会から見たら誰かの大切な誰か、の1人だ。すれ違ふ見ず知らずの人達にも大切な人がいて、誰かにとって大切な人でもあるのだ。私は皆を自分の大切な誰かと重ね合わせながら生きる事ができれば皆の大切な私になれると信じている。まだ見ぬ私の大切な人達もこの世にはあふれているはずだ。

私には社会を変える大きな行動はできないかもしれない。祖父のように見ず知らずの人に手を差し伸べるにはまだ時間がかかるかもしれない。でも私が関わる人、何気なくすれ違ふあの人でも誰かの大切な人であり、帰りを待つ人がいるのだと想像力を動かせよう。それが私の社会を明るくする運動だ。誰かの大切なあなた、は私の大切なあなたに。そして皆の大切なあなたに。優しい社会が広がって欲しい。

祖父が亡くなって半年。私は中3になった。今は祖母が1人暮らしには祖父の育てた花が咲いている。祖父の大切にされた花。そして祖母。私が大事にしていこう。きっと祖母は喜んでくれるはずだ。

★ ★ 常任委員長賞

気づける勇気



目白小学校
5年生
おおしま
大島
ゆいか
唯花さん

人はどうやって生きているのだろうかと考えてみると、その答えはすぐ身近にあるのかもかもしれません。明るいまえを幸せを考えた時、すぐに頭の中に浮かんできたのは、人の笑顔です。なぜかというとう、言葉が伝わらなくても、笑顔一つで国を越えて、心と心がつながることが出来るからです。そして、笑顔の連鎖で人の心を元気にしたり、その元気になった姿を見て、逆に勇気づけられたり、心がどンドン動かされて、それが他人への思いやりにつながるきっかけになるかもしれないからです。そして、次にいるんなことに目を向けて気づくことが一番大切だと思います。

②が欠けている場合。将来に希望をもつためには、自分に自信をもつ必要がある。私は6年間そろばんをやってきたが結果が出ないこともあった。でもこつこつ続けていくことで、思いがけない嬉しい結果も出て、自分に自信をもてた。だから諦めないで努力を続けて認められるように経験を重ねると良いと思う。また、周りの人は成果が出ていなくても努力を続けている人を認めることが大切だと思う。

そして③が欠けている場合。関わる人を増やして自分を信用してくれる人を増やす。その為に挨拶をする。挨拶はその人の存在を認める第一歩になるからだ。でも実際に犯罪を犯した人にも挨拶ができるのかと聞かれると怖くてできないかもしれない。まずは身近な人への挨拶から始めて、その輪をどんどん広げていく。

もし友達がむしゃくしゃから悪いことをしそうになっていたら、隣にいて悩みや話をさく。そうすることで今度は、自分がむしゃくしゃしている時、その友達が悩みを聞いて一緒に考えてくれると思う。私も、頼られる存在になりたい。そうして自分はこんなにも期待されているのだと思える機会をたくさんもつこと。

以上が心のブレーキをかける助けになるのではないかな。今後も自分のブレーキをもつとともに、周りの人の心のブレーキとなっていきたい。

とれるか自信も無いです。でも、目をそむけないで気づいてあげられることや、そばで笑顔でいるだけでも、もしかしられたれかの支えになるかもしれないと思っています。

世界中の人に明るいまえは何かと聞いたらその答えは、みんな違うと思います。なぜかというとう、おじいちゃん、おばあちゃん、大人や子ども、いろいろな国の人たち、みんなそれぞれ育った環境や時代、経験も違うから、やっぱり思い浮かべる未来や目標も幸せの感じ方も全く違うと思います。でも、笑顔だけは、言葉のいらない共通な心を通わせる方法だと思います。そして、人のために積極的に助けようとする行動は、勇気が持てなくて、自分にはとても難しくなかなかなか出来ないけれど、私に出来ることは、人に対して笑顔で接していく事だと思います。それがだれかの笑顔につながるって、どんだん広がっていくような、小さな一歩をふみ出せる勇気を持ちたいです。

私が今できる人への思いやりは何かと考えたら、弱い立場の人や困った人が近くにいたら、すぐに気づくことが第一歩だと思います。でも、身近ではないテレビの中の悲しい事件や事故、国を越えて争って傷ついている子どもとかを見ると、その時は、自分に置きかえたり、相手の立場になっているの考えるけど、現実にもどるとすぐに忘れてしまう自分があります。あまにも生活している環境が違ひすぎて、自分に何が出来るのか分からないし、どんな行動が



★ ★ 常任委員長賞

第三の居場所



駒込中学校
2年生
うへだ
上田
ちか
周さん

人はどういう時に犯罪や非行に走るのだろうか。私は、自分に理解者が一人もいないと感じてしまうような時、つまり自分の居場所がないと感じる時には犯罪や非行に走るのではないかなと思う。

私は一年前に長崎県から、ここ巣鴨に引っ越してきた。最初は友達が一人もいない環境に突然放り込まれて不安で仕方なかった。それでも学校に通い続けることができたのは、一つには家族の支え、もう一つには琴部という場所ができたからだ。琴部に入った事で、私は一気に色々な人と知り合うことができた。上級生や同級生はもちろん、顧問の先生、お琴の先生、そして演奏を見に来てくれる地域の方々である。琴部 は年間を通して、秋まつりや駒込広場まつり、駒込福祉作業所新年会など地域のお祭りや行事にたくさん参加させてもらっている。夏には「社会を明るくする運動」の一環として、演奏をさせていただいた事もあった。

琴部の同級生はどんなことでも話せる一番の親友となった。お琴の先生は学校の先生とは違った立場から私のことを見守ってくれる存在だ。そして、地域の方々には私達の演奏を聴きにきて下さる大事なお客様でもある。自分たちの演奏を喜んでくれる方がいると、とても嬉しくなるし、もっと練習にもうまという前向きな気持ちになる。琴部という居場所ができたことで自信を持つことができ、そのうちクラスメイトとも打ち解けられるようになった。新しい環境にすつき慣れることができたのだ。家族が第一の居場所、クラスを第二の居場所とするならば、琴部が私にとって第三の居場所である。

私達中学生は、学校での人間関係が全てだと思いがちだ。しかし、世の中には様々な年代、様々な職業や立場のたくさんの方がいる。たとえ学校の先生



★ ★ 優秀賞

ゆずりあい・助けあいを大切に



目白小学校
5年生
おおにし
大西
りな
璃奈さん

わたしが小さいころ、お母さんはいろいろな人に助けられたと聞きました。それがきっかけで、わたしはゆずりあい・助けあいについて考えてみました。

お母さんは、こう話していました。「今はバリアフリーでエレベーターがある駅も多くなったけど、璃奈が小さいころは、バリアフリーがありません。階段の上までベビーカーを持っていくのは、とても重くて大変でした。だから、そんなとき、通りがかった駅員の人や、全然知らないサラリーマンらしい人が、サッとベビーカーを持ち上げて、階段の上まで上ってくれたな。」と話していました。また、そういうことが一度や二度ではなかったそうです。今でも、階段だけしかない駅があります。わたしも大人になったら、おんがえしとして、助けたいと思います。

わたしが電車に乗っているときのことでした。ゆう先席の前に、にんしんしている女の子がいました。その時、わかいお姉さんが立ち上がり、にんしんしている女の子に席をゆずりました。にんしんしている女の子は、まだおなかは大きくなっていませんがマタニティマークをつけていました。わたしはゆずりあいのポスターを見たことはありませんが、本当にゆずっているところは、初めて見ました。また、つい一ヶ月ほど前のことです。わたしは、もともとゆずりあったほうがいいと思います。なぜかというとう、ゆずられた人も、ゆずった人も、まわりの人もうれしそうだったからです。わたしも、にんしんしている人や体が不自由な人に、席をゆずりたいと思います。

もう一つ、わたしが一番おどろいたことがあります。夕方、ふみきりの中に、おじいさんが取り残されていました。かなりの高い者で、なにより、荷物がとても重そうでした。「どうなってしまうだろう。」わたしは不安になりました。助けたいけど、助けたらわ

たしまで命があぶなくなってしまう。助けることはできませんでした。その時、サラリーマンらしい人が、おじいさんの荷物を持ち、おじいさんのせなかをおし、無事、二人とも助かることができました。サラリーマンらしい人も、荷物を持つと、とても重そうでした。ふみ切りがしまるのが、電車が来るよりいぶん前だったから良かったものの、二人ともききいばつでした。まわりにはいた人も、安心していました。おじいさんも、助けてくれた人に、何度も何度もお礼を言っていました。わたしは、とても勇気のある行動にでた男の人がいることに、日本をととてもほりに思いました。

最近、ゆずりあい・助けあいについて気をつけている人がふえたと思います。三年後、東京オリンピック・パラリンピックが開きたいされます。外国人にも、「日本って思いやりのある国だな」と思われるような、よりよい国づくりを、みんなですていきたいと思います。強く思いました。

わたしは不安になりました。助けたいけど、助けたらわ



★ ★ 優秀賞

勇気をだして



西池袋中学校
2年生
おがわ
小川
こうせい
航聖さん

知らない人、怪我をしている人、妊婦の方々困っているとき、「大丈夫ですか?」と言う事は勇気が必要です。簡単だと思っていても実は難しいものです。僕も手助けできたらとは思いますが、声をかけられず、そのまま見てみぬふりをしてしまいました。

そんな僕にとって印象に残る2つの出来事がありました。1つ目は昨年の正月に家族でスキーに行った時の事です。父親の教えもあり、そこそこ斜面を滑れるようになり調子に乗ってきた頃、大人の人達がジャンプを決めるところを見て自分もしたくなり、ジャンプに挑戦したところ、大転倒してしまいました。みんなに追いつこうと起き上がろうとしたところ右足に激痛が走り、起き上がってスキーを履きたくても立つことさえできませんでした。そんな時見知らぬお兄さんが僕を見つけてくれてスキーを脱いで僕を背負ってグレンデの救急センターまで降りてくれました。そのお兄さんにお礼を言おうと名前を聞いたら名前も名乗らずに行っていました。そのお兄さんのやさしさは今でも忘れません。

2つ目はその骨折のため、松葉杖で通学していた時の事です。電車で通学していた僕にある男性が「この席座っていいですよ。」と座っていた席を譲ってくださいました。僕は「大丈夫ですよ。」と言ったのですが、「私は大丈夫ですので座ってください。」と笑顔で優しく言われたので僕は「ありがとうございませ。」と言って座りました。

それから月日もたち、僕の骨折も治ったころバスに乗っていた時、お年寄りのおばさんが空いている席がなく立っていました。席を譲りたいけど恥ずかしいという思いがあり声をかける事をちゅうよしていた時、ふと前に席を譲ってくださいった男性の事とスキー場のお兄さんを思い出しました。勇気を

出して言ってみようと思いいこの席に座っていいですよ。」と言えました。その時は恥ずかしかったのですが、その方に「ありがとう」と言われた後は気持ちが良い、勇気を出してよかったと思いました。

僕は父の仕事の都合で何回も引っ越しをしてきました。3年前に東京に来て環境の違いにとても驚きました。東京は人が多く、誰もが忙しそうで声かけづらい環境でした。いままでいた岩手、静岡、山梨などでは、町の人達がいろいろな場面で声をかけてくれる環境だったので安心して暮らしていたんだなと今になって思います。そういう僕もようやく東京の環境になれ、安心して生活しています。東京は田舎よりも人口が多い分、お年寄りや妊婦さんそして障害のある方などの体力・健康的に困っている人達がたくさんいます。そういう人達への手助けを少しでも出来るように自分に出来る事は何かと考えてみました。

僕なりに考えて今の自分に出来る事、「小さな思いやりを常に心がける事」だと思います。思いやりを形にすることは、恥ずかしいと思うことを無くし、積極的に行動することだと思います。

この作文で今までできていなかった自分の弱さを知ることでかえって強くなる事、思いやりを常に心がける事」を意識して、勇気をもって少しずつでも行動に起こしていきたいと思っています。そして「小さな思いやりをできる人」になりたいと思います。



★
★
優秀賞

話すことは人との関係を明るくする

さくら小学校 5年生 小池 遥之祐さん

ぼくは小学校に入学してから今までに2回転校をしました。今は3つめの小学校に通っています。転校というと、ふつうの人はどんなイメージをもっているのでしょうか。今の学校の友達や先生との別れがいやだ、さみしい、とか、良くないイメージをもつのがふ通だと思います。習い事の先生や友達とも別れなければならないし、学校の他に近所の友達とも別れなければならない。実際にぼくは2回の転校でたくさんの人達との別れを経験しました。でもぼくは、転校するといふ事もあると知りました。

最初に転校したのは1年生の10月でした。神奈川から大阪に引っ越しをしました。初めての転校だったので初めての転校だったのでとても緊張して、最初に教室に入るときはドキドキしました。けれど大阪のみんなはぼくが来たことをとても喜んでくれて、次から次へと話しかけられたり、ランドセルや上ぐつを置く場所を教えてくださいました。次の日から、学校のことがわからないぼくにみんなはとても親切にいろいろ教えてくださいました。ぼくは生まれてからずっと関東で育ったので、はじめは大阪のみんながしゃべっている言葉が今まで聞いたことのない言葉で驚きました。でもみんなは普通にぼくにたくさん話しかけてくれたから、ぼくは話す言葉が少し違って、自分からも周りの人にたくさん話しかけるようにしました。そのうち、新しい学校にもだんだん慣れていって、少しずつみんなのように大阪の言葉が話せるようになっていきました。みんながたくさん話しかけてくれたり、自分からも積極的にたくさんの人と話すようにしたからだと思います。

4年生になった時、始業式の日にぼくのとりの席に知らない子がすわっていました。別の学校から転校してきた子でした。その子は誰ともしゃべらずに静かにすわっていました。ぼくはその子に話しかけたかったけどなかなか勇気がでませんでした。初めて見た子だったから、何を話しているのかわかりませんでした。その後、連絡帳に明日の持ち物などを書く時間になりました。隣の席の子はその日、連絡帳を持ってくるのを忘れたようでした。その時ぼくは話しかけるチャンスだと思い「連絡帳を持ってくるのを忘れたの？」と聞いてみました。その子はだまってうなずきました。ぼくは、自分の連絡帳を1ページやぶいてその子に渡しました。その子は喜んでくれました。このことがきっかけで、その子と少しずつ話しはじめることができました。その後の休み時間にも外で一緒に遊ぶと誘いました。次の日からその子とは色々話すようになり、とても仲良くなりました。その後、担任の先生がぼくの家に家庭訪問に来た時、先生がぼくのお母さんにこのときの話を話したそうです。隣の席の子は転校してきて誰とも話せずにいたけど、ぼくと話すようになった事がきっかけでクラスの他のみんなとも話せるようになり、友達がどんどんふえていったそうで、先生はぼくのした事をほめてくれたそうです。それを聞いたぼくのお母さんはとてもうれしい気持ちになったそうです。それを聞いてぼくもうれしい気持ちになりました。さらに、授業参観の時にはその転校生の子のお母さんがぼくのところにきて、「優しくしてくれてありがとう。」と言ってくれました。ぼくはまた、うれしい気持ちになりました。ぼくがしたことは、たくさんの人をうれしい気持ちにしたんだと思いました。自分から積極的に他の人に話しかけることはすごく大事なことでなだんと気づきました。

その後ぼくは、4年生の3学期に大阪から東京に引っ越しになりました。2回目の転校だから1年生の時よりは緊張しなかったけど、最初の日はやっぱり少しドキドキしました。今回もみんなは話しかけてくれたり色々教えてくださいました。ぼくも自分から積極的に周りの人にわからないことを聞いたり、話しかけに行くようにしました。そうすれば早くみんなと仲良くなれて、毎日を楽しくすごせるようになると思うからです。ぼくは今まで、たくさんの人との出会いや別れを経験してきてその事を学びました。周りの人と積極的に話すようにすることは、人をうれしい気持ちにしたりすると思います。このことは、明るい社会を作ることにつながる気がします。ぼくはこれから色々な人とたくさん話すようにしていこうと思っています。

★
★
優秀賞

いのち

ちゅうじょう ともか
千川中学校 3年生 中条 朋香さん

いのちには限りがある。それは、誰もが知っていることです。しかし、そのことをわかっているのでしょうか。私もいのちには限りがあることは知っていますが、それがどうしたことなのか、わかってはいない気がします。そのような限りあるいのちを考えたとき、ただ毎日をなんとなく過ごしてしまうのは、もったいないのではないかと、思いました。一人一人が自分のいのちを最後まで大切に生きる。それだけで、いのちを大切に思う気持ちにあふれた世の中ができるのではないのでしょうか。

私は、「一期一会」という言葉が好きです。ありきたりな感じがしますが、とても良いことを教えてくださいました。私は「一期一会」とは、その人やそのものと出会うのはこれで最後かもしれない、そんな気持ちをもって一つ一つの出会いを大切にしよう、という意味だと思っています。人と人とはいのちのちのちとの関わりあいです。生きていないと、関わることもできません。だからこそいのちを大切に、一つ一つの出会いを大切にすべきだと思います。

私は何でも「あとでいいや」と思ってしまいます。面倒臭いこと、嫌なこと、大変なことなどを後回しにしてしまうのです。そして、何をするわけでもなく、ただ時間がすぎてゆきます。これは、いのちを大切にしていることではないのでしょうか。いのちには限りがあるということは、つまり時間にも限りがあるということです。その限られた時間を有意義に使うことも、いのちを大切にすることになるのではないかと、思っています。一日二十四時間、一か月七百三十時間。長く思えるかもしれませんが、逆にこれしか時間は無いのです。まだ、時間あるからいいや、やる気でないからあと十分休憩、などということをしている間にも、時間は常に過ぎていき、もう二度と戻ってくることはありません。一分一秒をも大切にすることで、限りあるいのちの時間を有意義に使っているのではないかと、思っています。

そして、そのいのちの時間は人によって様々です。百年と長生きする人もいれば、十年も生きられない人もいます。与えられたいのちを全うできる人もいれば、事故や他人の手によって絶たれてしまう人、自ら絶ててしまう人もいます。しかし理由はどうであれ、与えられたその時間を全うしないのは、いけないことだと思います。せつかくのいのちをむだにしていると感じるからです。世の中には生きたくても生きられない人もいます。それなのに自らのいのちを絶つというのは考えられないことです。しかし、どうしても生きていくことがつらいという人もいます。けれど今はつらくても、必ず先にはいいことがあります。必ずです。私もつらいときそれを信じてきましたが、不思議なことに、本当にいいことが起こるのです。そのため、信じることはとても大切だと思います。また、他人のいのちを絶つなどは言語道断です。相手のいのちを絶つことももちろん、自分のいのちも傷つけていると思うからです。人と人とはいのちのちのちとの関わりあいです。些細なことでも簡単に傷ついてしまういのちには、互いに思いあう気持ちが大切なのではないのでしょうか。

「一期一会」の気持ち、いのちの時間には限りがあるということ、その時間は人それぞれで、与えられたいのちを全うすること。私はいのちを全うするうえで、これらのことが最も重要だと思います。そして、これらの共通の考えは「いのちを大切にすること」です。当たり前のように、これらのことを知っていても、いのちを大切にでき、結果的にいのちとは、をわかっていくことができると思います。わかっていけば、さらに大切にすることができる。つまり知ることは大切ということ。自分のいのちについての考え方は人それぞれだと思います。自分の考えをしっかりとつづけて、自分自身のいのちを大切にすることにつながるはず。ずっと同じ考えではなく、生きていく中で考え方が変わっても、それをわかっていきます。一人一人がそうしていけば、いのちをわかり、しっかりと向きあう世の中ができると思います。いのちへの理解を深め、大切にしていきたいです。

★
★
優秀賞

となりの子が教えてくれたこと

目白小学校 やまなか ここは
6年生 山中 心葉さん

私は、2016年12月14日から一週間都内の東大病院に手術のために入院しました。この日の前日は、学校で五年三組のみんなが手紙を書いて渡してくれました。とてもうれしかったです。

入院当日、長かった手続きが終わり、私の部屋の201号室に入りました。二人部屋のまど側のベッドで棚を引き出しに一週間使う物の場所を決め、しました。整理が終わった後に談話室で、母と一緒に勉強をしました。その日の夜は、一人で病室にいました。次の日は手術の日なので、不安でした。失敗しないといいな、ますいがいやだなと思いつつもねむりにつきました。

いよいよ手術当日。なぜか、分からないけれど、手術前に水を飲むのは午前5時が最後でした。手術は二番目だったので、ドキドキして待っていました。お昼頃に呼ばれ、手術室へとエレベーターを使って、移動しました。全身ますいだったので、口にマスクがあてられ、思わず吐き出しそうなおいの中で、徐々に意識が遠くなっていきました。

目が覚めると、そこは病室でした。近くには、家族がいました。手術後で酸素が不足しているらしく、口には酸素マスクがついていました。本当ははずしたかったけれど、かんごさんが「もう少しつけていてね。」と言われたので、つけていました。

母が、「DVD、借りてくるの。」と聞いてきたので、「うん、何でもいいよ。」と返事をすると、側にいた姉が借りてきてくれました。その間、母はずっと近くにいてくれました。とても安心できました。しばらくすると、姉がDVDを借りてきてくれました。私はますいがまだ少し効いていましたが、体を少し起こして、水を一口飲みました。プレーヤーにDVDをセットし、再生しました。ぼんやりとした視界でも、映像ははっきり見えました。

映画を見ていると、となりの子が「手術、おつかれ様。」と声をかけてくれました。「一緒に見てもいい。」と聞かれたので、「うん。」と返事をしました。すると、彼女は小さな紙を私に渡してくれました。「田川あやの小五」と書いてあり、彼女は私と同学年とわかりました。彼女は、私と同じくらいの背の高さで二つに三つ編みをしていました。それから私は彼女とたくさん話をしました。学校の話や家族の話をして、交かんした手紙を見せ合ったりして、とても楽しい毎日でした。

そして、あやのちゃんが退院する日が来ました。私はその日に検診の予定があったので、「また会おうね。元気だね。」と言うと、「うん。心葉ちゃんも元気だね。」と返事をしてくれました。そして、私は検診に行きました。

検診が終わって部屋へ戻ると、あやのちゃんがいたベッドは片付けられていました。私は、また一人になりました。姉が面会に来ていましたが、心の中は不安でいっぱいでした。数週間後には学校で新学期が始まります。自分の知らない時間がたくさん流れている中で友達や先生がどのように迎えてくれるか心配でした。

次の日は退院の日でした。退院手続きを終わらせ、検診して、久しぶりに外に出ました。とても太陽がまぶしくて、ふだんよりも、とても暑く感じました。

私は、この入院生活を通して学んだことがあります。それは、「人は、それぞれを支え合い、思いやりが深く、安心させることができる」ということです。私は一人になった時とても不安になります。その時には誰もとなりにはいません。でも、一人でもとなりにいてくれると安心します。一人ぼっちの時と、となりに人がいる時とは、気持ちが全然違います。まさに、そのことをあやのちゃんが教えてくれました。私はこのことから、この一週間のことを忘れず、もしも私のような気持ちの人がいたら、真っ先に、その子に寄りそいたいです。その子には、となりに誰かがいてはげましくしてくれた本当に温かいもの、幸福なものを感じてほしいから。どんな人でも、となりに誰かがいるその幸福感に感謝してほしいと思います。そうすれば、犯罪や非行のない社会が作れると思います。私は、それを実現できるように、生きていきたいです。

★
★
優秀賞

人と人がつながるもの

ねもと すみえ
西池袋中学校 2年生 根本 純衣さん

「おはようございます。」

「行ってらっしゃい。」

「さようなら。」

登下校時、毎日のように温かい言葉をかけて下さる人がいます。それは私の家の周りに住んでいる地域の方や同じマンションに住んでいる人、交通指導員さんの方々です。私は今まで恥ずかしい理由にあまり人と挨拶をする機会がありませんでした。しかし、地域の人達との関わりや交流ができてから挨拶をすることが当たり前のように感じられてきてだんだんと楽しくなってきました。

ある日、私がいつものように部活から帰る途中、前から同じマンションに住んでいる女の人が歩いているのを見かけました。

「こんばんは。」

と声をかけると、その女の人も

「こんばんは。おかえりなさい。」

と笑顔でこう挨拶をしてくれました。私は、知らない方でも挨拶をかわすという事、身近に住んでいる人達が家族の一員として見てくれている事、それがうれしくて挨拶をして良かったなと思いました。

私の祖父は、地域の見守りやより地域をよくするためのボランティア活動を行っています。「防犯活動」「防災活動」全て地域の人のために行動している祖父達を見て私は祖父に憧れと尊敬を抱きました。祖父になぜこのボランティア活動をずっと続けているのかと聞いてみたところ、地域の人々が安心・安全に暮らせるようにしたいからと話していました。また、ボランティア活動を行って地域の人達との連携がとれるようになったとっていて、私は祖父の話を聞いて町は地域の人々との協力によって成り立っているんだと実感し、祖父の町に対する愛情と優しさに、心を打たれました。このような地域の関わりこそが私に大切な事を気付かせてくれました。

もう少し具体的には特に、夜の道路は自転車の無灯火が多いため、夜間のパトロールを定期的に月二回と、また地元小学校の下校時には学童通りを中心に週三回小学生の見守りを行っている様子聞き、改めて安全・安心に対する意識を強く感じました。

また、別に効果的な子供見守り活動は、地域の方々に協力し合っていたら日常の買い物や犬の散歩、植木の水やり等の時間を登下校時間に合わせるだけで、安全が守れると思います。

私は祖父の話や聞いて地域の人達や出来事を知って良かったし、地域の人達がどれだけこの町を愛しているのかが分かりました。この地域の伝統を私たちがしっかりと受け継ぎ未来の人達に引き継いでいきたいです。この地域がよりよくそして安心・安全に暮らせるように私はもっと地域を知り、ボランティア活動にも参加したいと考えています。まずは、身近に住んでいる人や家族に挨拶がきちんとできるように努力していきます。人と人が笑顔にそして良い町が作れたら良いです。この地域との関わりや交流をいつまでも続けていけるように。

